

木造阿弥陀如来坐像及び両脇侍像の修理事業について

◆大谷寺の阿弥陀三尊像と修理事業に至る経緯

(1) 大谷寺の阿弥陀三尊像

大谷寺は、丹後国一の宮である籠神社に隣接する寺院であり、籠神社の神宮寺として一体的な発展を遂げ、中世には多くの塔頭を有する丹後府中の有力寺院でした。

大谷寺に伝わる阿弥陀如来坐像と両脇侍像（阿弥陀三尊像）は、寺院の本尊として伝来する三尊です。三尊像のうち両脇侍の観音菩薩立像と勢至菩薩立像は、古くから平安時代に造られた優品として知られており、昭和 63 年（1988）に、宮津市指定文化財に指定されました。

一方で、中尊の阿弥陀如来坐像は、両脇侍より後世の作であり当時の指定対象から外されてきました。しかし、彫刻の専門家から阿弥陀如来像もまた優れた仏師による優品である可能性が指摘されており、長らく本格的な調査が待たれる状況でした。そして、平成 29 年に京都府文化財保護課により実施された両脇侍像の調査に際して、阿弥陀如来坐像の調査も合わせて実施され、この時に胎内から複数の墨書銘文が発見されました。



修理前の阿弥陀如来坐像と両脇侍像

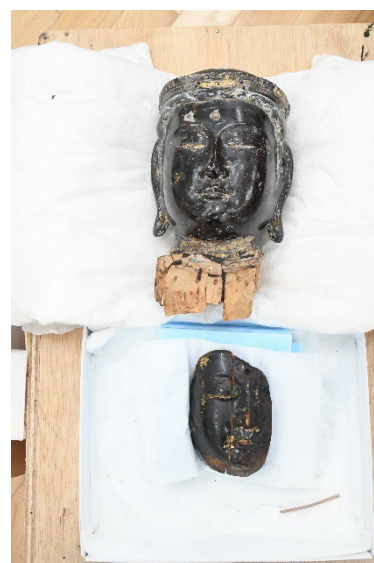
(2) 京都府指定、そして令和の大修理へ

翌年の詳細調査の結果、阿弥陀如来像は、永正8年（1511）に、大谷寺来迎院の本尊として丹後国守護・一色義有の母と見られる栄玉が願主となり、京都を代表する仏所である七条仏所の仏師である康珍と康琳により制作されたことが判明しました。康珍は、東寺講堂本尊の大日如来像（重要文化財）を造像するなど東寺大仏師として重要な役割を果たしたことで知られる人物です。大谷寺の阿弥陀如来坐像は、現在確認されるうえでの康珍最後の作例であり、室町後期の七条仏師の動向を知る上で重要な作品といえます。また、造像時期である16世紀の丹後国は、延永春信らの国人や、細川氏や若狭武田氏らによる合戦が続く混乱の時代であり、本銘文は史料の少ない16世紀の一色氏の動向を知る上で価値が高く、平成31年3月29日付で両脇侍像とあわせて、京都府指定文化財の指定を受けました。

しかしながら中尊及び両脇侍像とも、経年劣化が著しく、令和3年度から2ヶ年にかけて京都府教育委員会や朝日新聞文化財団、川合京都仏教美術財団の資金支援を得て、三尊の保存修理事業を実施しました。今回の修理に際して、像の胎内から中世と思われる焼損痕や新たな墨書銘文が発見され、特に勢至菩薩像の頭部からは当初のものとみられる炭化した面部が発見されました。また、江戸時代の修理に際して関わった人名が記された紙片が勢至菩薩像の胎内から発見されるなど、数多くの新たな発見が見られました。



本堂からの搬出作業（左）



勢至菩薩の頭部から発見された焼損面部（右）

◆修理事業の概要

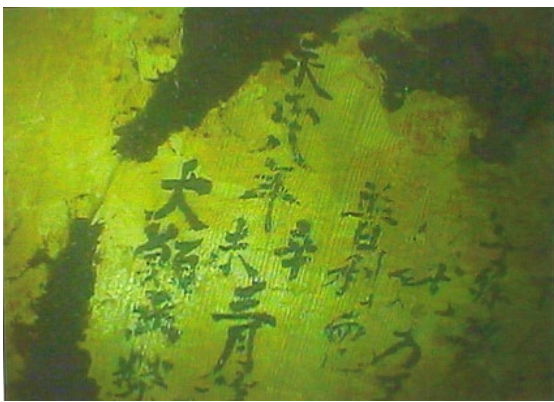
件名	京都府指定文化財 木造阿弥陀如来及両脇侍像 保存修理
修理対象	・阿弥陀如来坐像＝室町時代（永正8年（1511）の墨書銘あり） ・両脇侍像（観音菩薩立像・勢至菩薩立像）＝平安時代
修理工期	令和3年5月～令和5年3月（2ヵ年継続事業）
事業費	10,523,700円
受託者	公益財団法人美術院（京都国立博物館内国宝修理所）

◆修理事業の経過

時期	内容
令和3年5月11日	≪閉眼供養≫ ・法要に先立ち、三尊像の説明会を開催 ・閉眼法要（魂抜き）の後、阿弥陀三尊像を修理工房へ搬出
令和3年5月～ 令和4年3月	≪第1年次修理≫ ・三尊の本体及び阿弥陀如来坐像の台座の修理を実施 ・像の胎内より焼損痕等や墨書が新たに発見される
令和4年4月～ 令和5年3月	≪第2年次修理≫ ・阿弥陀如来坐像の後背及び両脇侍像の台座の修理を実施 ・その他、本軀も含めた最終仕上げを実施 ・第1年次に続き新たな墨書が発見される
令和5年3月9日、10日	≪搬入・開眼法要≫ ・2日間にかけて本堂への移送作業を行う ・安置後に開眼供養（魂入れ）を行う



大谷寺本堂（左）参詣道から見た天橋立（右）



阿弥陀如来像胎内墨書①（永正8年の年号と「栄玉」の名が見られる）



阿弥陀如来像胎内墨書②（康珍（左）と康琳（右）の名が見られる）



本堂への移送及び安置作業の様子



修理後の阿弥陀如来坐像と両脇侍像